



新島得夫氏(社友)に聞く

父・公義と新島家

聞き手

河野 仁 昭

幼いころ

——いきなりお歳をお聞きして失礼なんです、明治何年のお生まれですか。

新島 明治三十年です。

——お生まれになられたのは、どこですか。

新島 京都です。当時は愛宕郡下鴨村といっていました。いまの左京区下鴨宮崎町で、下鴨神社の一の鳥居を入れて、神社に向かって右手の家でした。

——すると、下鴨神社の社家ですね。いまも残っていますか。

新島 残っているんです。門が残っています。私たちが住んでいたころはまっ赤な門だった。いまは黒くぬりかえている。

小さいときは境内を流れている蟬の小川で遊びました。あの川は湧き水でね。向こう側は冷たくて、こっち側は温かいのです。

その下鴨の家から歩いて、同志社の幼稚園へ通いました。ラーネット先生の家の裏に幼稚園がありましたね。

——小学校も下鴨で？

新島 いや、小学校は、五条富小路の有隣

小学校です。

——下鴨からだど、ずいぶん遠いですが、歩いて？

新島 小学校へ上るころには、五条の中村栄助さんの疎水端の借家へ移っていたんです。そして三年生のとき、父(公義)の勤めが変わったものだから東京へ移ったのです。

——明治三十年代の五条通りというのは、淋しかったんじゃないですか。

新島 いや、けっこう賑やかだったですよ。

——道幅は狭かったんでしょう。太平洋戦争中に強制疎開で抜けたんですから。

新島 あまり広い道ではなかったなア。私など疎水で顔を洗ったのです。あるとき、顔を洗っておいたら郵便車にはねとばされましてね、疎水へ落ちて、父に助けてもらったりしたことがあったけど。

——建仁寺で遊んだりされましたか。

新島 近くだったから通り抜けることはあったけど、遊ぶことはなかったなア。

——お父さんはどういってお仕事をしておられたんですか。

新島 五条にいたときは大阪の保険会社か

なにかに勤めていまして、週末にしか家へ帰らなかつたですよ。

——通勤できなかつたんですね。

新島 そうだと思えます。そのころは京都駅のことを七条駅といつてね、煉瓦造りの建物だった。

——その建物は明治十年二月に出来たもので、大正天皇のご大典のときに壊して建て替えられたはずですが、京都ではそれが一番最初の煉瓦建てだったそうですね。

当時はもう淀川の船便というのはなくなっていたんですね。

新島 なくなっていたと思います。聞いたことがなかった。

——お父さんは同志社英学校を明治十六年に卒業ですね。



新島得夫氏

新島 そうなんです。それから同志社に勤めまして、いまは失くしたけど同志社の辞令をもらっていた。確か「庶務主事ヲ命ズ」と書いてあったように思うんだけど。

——主事なんて名称あったんですね。

新島 そう書いてあったように思います。

——明治十七年から十八年にかけて、新島襄先生が外遊されましたから、その間、襄先生の代理で庶務のお仕事をなさったんですね。

新島 そうだと思います。それから、奈良や新潟などへ伝道に出て、襄先生が亡くなつて間もなく伝道も止めたんです。

——いつごろまで伝道のお仕事をしておられたかわかりませんか。

新島 わからんのだなア。中村栄助さんが国会議員の選挙に出るので、その選挙事務長のようなこともしたようだけど。

——頼まれたんですね。

新島 そうでしょう、詳しいことはわからないけどねえ。選挙違反のようなことがあって困ったというときはきいたなあ。

中村栄助さんのお世話であつたと思います。が、京都鉄道株式会社というのに就職したん

だが、明治三十一年七月に退職しているのです。それからあちこちの会社を、三年ぐらいで転々と変つたんだなア。

父・新島公義のこと

——なるほど、それで東京へ？

新島 そう。私は麻布の尋常小学校へ転校して、中学校は、芝中学校といつて、当時は浄土宗増上寺の境内にありましたが、東京府立一中とともに進学校として有名だった。そこへ進学したのです。

——お父さんは、「同志社へ行け」とはいわれなかつたのですか。

新島 言いません。落ちぶれちゃつて学費も出せないんだから……。私はやむをえず退学して、東京商工学校へ入りなおして商業を学んだのです。もともと私は農業をやりたかつたんですが、家のほうがどうにもならないものだから、その学校を卒業して三菱銀行へ入つたのです。

——公義さんの実家は植栗家ですが、新島家とはご親戚だったんですね。

新島 そうじゃないんだ。植栗は安中藩の家老ですね。襄先生は函館から脱出してしま



新島襄と八重

うし、その弟の雙六——私の祖父ですが——は体が弱くて、明治四年二月に二十五歳で病死したのです。それで公義は養子として、十歳のときに新島姓を名乗ることになったのです。幼名を球弥といいました。

明治九年四月に、京都の襄先生に呼ばれまして、民治（曾祖父）らと共に一家は京都へ移るのですが、公義は京都へ移るころは、師範学校を卒業して、郷里で小学校の先生をしていたのです。卒業証書や辞令が残っています。

——雙六さんはいへん秀才だったそうですが、資料は残っていないのですか。

新島 なにもありません。秀才だったかど

うか知りませんが字は上手でした。安中の弁治（雙六の祖父）の墓に、雙六の筆で和歌が刻んでありますが、上手な字です。和歌は弁治の歌ですが。

——お父さんの公義さんは、転々とお仕事を変わったということですが、なぜでしょうね。

新島 根が正直で、短気なんだ。気が小さいし……。群馬県人だね（笑）。駆け引きができないんだよ。

同志社の英学校を出てるんだから、英語はできるんだ。それで保険会社で外人相手の仕事をしたり、外国資本のヴァキューム・オイル・コンパニーという油の会社へ入ったりね、いろいろやるんだが統かないんだよ。山本唯三郎という人の木材会社にもいたことがあります。樺太にも三年ほど居たことがありました。

——山本という人は、第一次世界大戦のとキ木材で産をなして、同志社の図書館（現啓明館）を寄付して下さった人ですね。

新島 その人について朝鮮へ行って、「虎狩りをして、虎の血を飲んできた」なんて父は言っていました。

——「虎大尽」というあだ名があった。（笑）
新島 父は晩年、その山本さんが経営していた京橋会館のマネージャーかなにかやっていた。ちょうどこの辺（東京事務所のある聖書館ビル近辺）にその会館はあったのです。
——同志社の卒業生などで訪ねてこられる方がいたでしょう。

新島 そうだなア。母の話によれば、下鴨の家へは大西（祝？）さんがよく遊びに来られたそうです。私は小さかったのであまり憶えていませんけれどもね。

東京へ来てからは方々へ行っていました。徳富（蘇峰）さんや、小崎（弘道）さんとか海老名（彈正）さんとか、そういう人の家へよく行っていたが、あれはきつとねだりに行ってたんだ。（笑）

——おつきあいがあったわけですね。

新島 つきあいといっても、ねだりに行くだけだから（笑）。東京の高輪に上野という人がおられて、私は使いにやらされたことがあるんです。

——同志社の政法学校の教頭をしていて、明治二十九年に退職して、勸業銀行だったかへ入っていた上野英二郎ではないでしょうか



得夫氏の父・公義

ね。きつとそうでしょう。

新島 その上野さんの家へ行って、封筒をもらって帰ったことがあります。中味はお金なんです。そういう生活でした。私は十か二で、まだ小学生だったから、ただお使いをただだけで、家の事情などはよくわからなかったし、上野さんに晩ご飯を馳走にたつてお話もきいたんだが、忘れちゃった。

——お父さんから、新島襄先生のこととか、同志社のことをお聞きになったことはあまりございませんか。

新島 父は家ではあまり話をしなかったし、私はまだ子供だったからね。ただ、「これは大事なものだから」といって、古い書類とか写真を行李にいっぱい詰めて大事にしておりましたが、その行李を空襲で全部焼いて

しまつてね。だからもう何もありませんよ。

——お父さんが亡くなられてからのことですね。

新島 そう、死んでから。

——亡くなられたのはいつですか。

新島 大正十三年五月十六日に亡くなりました。

——ご病気で？

新島 いや、怪我です。大正十二年九月に関東大震災があつたでしょう。あのとき麻布の家が倒れて、ここ（後頭部）を倒れてきた木材で打つたのです。それで入院していましたが、健康は快復しなかつた。

——それは全く存じませんでした。お母さんやご家族の方は？

新島 母は無事で、八十四歳まで生きました。亡くなったのは、昭和三十四年六月十九日でした。

——お父さんは亡くなられたとき、おいくつだったんですか。まだそんなにお歳じゃなかつたでしょうね。

新島 文久元年十月二十四日生まれだから、いくつだったか。

——文久元年、一八六一年だから、五十四

歳か五歳ですわね。

新島 そう、そんな歳だった。

——新島さんは、震災のときは？

新島 私は勤務の關係で京都にいたのです。京都で三菱銀行の寮へ入っていました。

——それで無事だった？

新島 そうですわね。

中村栄助さんのこと

——お父さんが亡くなられて、その後、ご家族は困られたでしょう。

新島 そうです、思いがけない事故だったからね。それで京都の中村栄助さんが、「京都へ来なさい」といって、母と妹を引きとつて下さったんですよ。私もまいりまして、三人で。弟は大連へ行っておりましたが。

——五条のお家へ？

新島 いや、渋谷通りの家です。一年か二年ご厄介になって、それから下鴨芝本町へ引越しました。

——渋谷通りのお家は、息子さんの高山義三さんのお家ではないんですか。

新島 そうなんだろうが、栄助さんご夫婦が住んでいた。そのごろ、義三さんは大阪で



得夫氏の母・かず

弁護士をしていたので、その家には住んでおられなかったのです。

——谷へ突き出しているというか、崖の上の家でしょう。

新島 そう。義三さんとは、子供のころキヤッチ・ボールなんかやって遊びました。

——じゃあ、親しかったわけですね。

新島 それは子供の頃のことだから。義三さんは昭和の始めごろだったか、労農党かなにかの仕事をしていましたね、あの家の下の谷へ人々を集めて、演説をやったりしたんですよ。

——どうして、谷で？

新島 警察がうるさいからというのでね。監視されていたようでした。

——あの谷でねえ。

新島 案外、降りてみると広い谷ですよ。

渋谷通りにいるとき、家の表の通りを火葬場へ行く車が通るのです。ところが月に四回ほどその車が通らない日があるので、どうしてか人にたずねたら「友引」だというんです。そのときはじめて「友引」という日があることを知りました。火葬場が休みの日なんだ。(笑)

——小学校のところに中村栄助さんの借家におられたというお話でしたが、東京へ移られてからも、お父さんは栄助さんとはおつきあいがあつたわけですか。

新島 そうなんです。栄助さんには子供が四人ありましたが、おあいさんという人は歯医者へ嫁に行って、次男(信二さん)がうちへ来ていて、うちから明治学院へ通っていたんです。

——中村栄助という人は、新島襄先生の在世中から理事のような役目で同志社には大変貢献されたんです。襄先生が亡くなられてからは、何度も総長代理などなさっていますしね。どういう方だったんですか。

新島 家は五条通りの饅節屋つまり乾物屋さんでした。私などは肉親じゃないものだから、

「たぬきおやじ」なんて悪口いう人がいたことも知ってるけど(笑)、人の世話もよくされるし、いい人だったと思います。

——商人で政治家でしたから、悪くいう人もいたわけですね。

新島 中村さんは「オウゴ銀行」——、どう書くのかな「鴨後」？オウは「鴨」だろうが、「ゴ」は五条の「五」だったかも知れないけど、そういう銀行も経営していた。ところがその銀行がつぶれちゃってね。あの人は頭取だったんだが、銀行に取付けがあつてものんびりしているんだ、「人間はのんびりやらなきゃ駄目だよ」といつてね。それでつぶれちゃった。たしか副頭取は自殺したはずですよ。あの時分のことだから、損害保証などもかかってなかったんだらうな。

——昔は銀行がよくつぶれたんだそうですね。

新島 そうなんだ。それで中村さんはね、私が三菱銀行に就職が決つたので挨拶に行ったら、「銀行なんてやるものじゃない」というんだ(笑)。「やめろ」ってね(笑)。私は「下っ端だから大丈夫です」といったんだけど。



妻の父・民治と母・登美

——新島さんを可愛がっておられたんでしよう。それで心配して……。

新島 そうかも知れないが、自分の銀行がつぶれて余程こたえちゃったんだな。(笑)
中村さんは私たちが行ったころはもうお年寄りで、毎朝麦のおかゆ、オートミールというのですか、そういうものを食べるんです。私たちもいっしょにそれをいただくんだが、

私は二十代だから山盛り食べても九時ごろになると腹が減るんだ。それで、よく円山へ行つてトーストを食べた。

——どろどろとしたものでしょう。

新島 そう。それにちよどくずのようなものをませて食べるんだ。すぐ腹が減るんだが、一年間あれを続けたから私は健康になったのかもしれんね。

——栄助さんの跡は、どなたが継がれたんですか。

新島 長男です。やはり乾物屋をやっていました。今はどうなっているか知らないけど。

——京都は震災にあつていないですから、行かれたらこの家だとすぐわかりますね。今でも憶えておられるでしょう。

新島 行けばすぐわかります。

新島八重のこと

——ところで、八重さんのことで何かご記憶に残っていることはございませんか。いろいろおありじゃないかと思うんですが。私どもは八重さんの資料がなくて困っているんです。

新島 いや、これといってないんです。私はたまに仕立物を届けに行く程度だったから。

——仕立物というのは？

新島 東京から京都へ移ってからのことだけれども、母が八重さんから頼まれて、着物を仕立てるのです。

——八重さんが持つて頼みに来られるわけですか。

新島 人にことづけてね。それが出来る私を持つて行った。すると、「ありがとう」といって受け取る。

——それだけですか。

新島 それだけです、いつも。

——親戚づきあいはなかったんですか。

新島 あまりなかったですね。三菱銀行の支店長が建仁寺へ参禅に行かれたとき、そこで八重さんに会ったら、「新島はどうしていますか」とたずねられたそうです。そんなことか、「どうしているか」といったことづけはたまにありました。どちらからともなく行ったり来たりということはないから。

——お父さんがお元気なときから？

新島 そうだと思えます。父は、自分は落



裏の弟・雙六

ちぶれたんだと思っていましたから、自分から出掛けていくということはなかったようです。それで私たち子供もね。

——八重さんはお茶を教えたりしてお一人で生活しておられたんでしょう。旧邸にはいまでも茶室がありますよ。

新島 そうですか。建仁寺へちよいちよ行っているとか、なんでも同志社に随分ご厄介になっているときいていました。家のことなどでも「あそこを直せ、ここを直せ」といったり……。同志社の人からそういう話をききました。

——ああ、それはお家も宅地も、明治の終りに全部同志社へ寄付なさって、同志社からはたしか年金百円を差し上げていたようです。生活費だったんでしょうね。そのときか

ら、家も庭も同志社の所有物件になってしまったんですから、「直してほしい」といわれるのは当然だと思うのです。明治十一年に建てた家ですから、ぼつぼついたんできてもいいでしょうね。

八重さんは、ながく一人で住まわれて、昭和七年六月に亡くなられますね。

新島 私はそのとき京都にいましたから、よく知っています。葬式は私たちがやっていますが、なきやいかんものと思っていたのですが、八重さんの遺言だからと言って、すべて広津さんという方が取り仕切っているんです。

——同志社の社葬だったからではないですか。

新島 そうですか。私たちはなにひとつすることがなかったのです。やはり遠い人だったという感じでしたなあ。

——広津というのは、新島襄先生が大磯で亡くなられるとき、新潟で伝道をしていた卒業生の広津友信ですか。

新島 そうだと思います。若王子の墓地に、その方のお墓がありますね。

——松山高吉の墓の右側ですか。

新島 そうです。

同志社と新島家

——京都に住んでおられても、同志社を訪ねられることはあまりなかったわけですか。

新島 いや、遠縁に当たる速水藤助・静枝夫婦が、同志社の烏丸通りをへだてた向かい側の、中学校の寮かなにかの一棟にいましたので、そこへはよく遊びに行きました。

——北寮の一棟でしょうね、烏丸上立売を下がった西側にあっただんでしょ。今は大学会館のビルが建っています。

新島 白塗りの土塀があっただね、木造の建物が何棟かあった。静枝というのは新島家と血のつながりがあるものだから（裏の姉・時子の孫、私が遊びに行く学校の中を案内してくれるんだ。いまの工学部の所がグラウンドになっていてね。

——ハリス理化学館のあたりでしょうか。

新島 そう、そのあたり。

——あのへんにグラウンドがありましたか。

新島 ありました。門を入ってすぐ左のほうにね。

——じゃあ、いまのグラウンドでしょう。

新島　そこでラクビーなどやっていた。

——静枝さんに案内していただくというよ
うな機会にしか、校内へは入られなかったん
ですか。

新島　まア、そうだな。

——裏先生が創られて、お父さんも勉強さ
れた学校なんですけどね。新島家ほど関係の
ふかい方はほかにいらっしやらないのに。

新島　でも、どうも、きまりが悪いから。

うちが落ちぶれたと思っていたからね。だか
ら、なるべく近寄らないようにということだ
ね。

——それは、お父さんが？

新島　父もだけど……。

——速水藤助さんとはお話なさったんでし
ょう。

新島　それはしました。でも学校のことは
あまり話をしなかったなア。私もたずねもし
なかったから。

——速水さんのおうちは、その後どうなっ
たんですか。

新島　昭和のはじめ、ご大典のとき火災が
あったでしょう。いま本部になっている建物
が。

——有終館ですね、昭和三年十一月に。

新島　あの火災のとき、速水藤助は大学の
予科長をやったもんだから、責任をとって
辞任したんです。

——速水先生が？ 海老名総長や理事だけ
じゃなかったんですか、辞職されたのは。

新島　有終館が予科の教室になっていたも
のだから、それで引責したんです。そうきい
ています。

——じゃあ、同志社の教員も辞められたわ
けですか。

新島　いや、教授としては残ったよう
です。そのころは榊形通りか、なんでもあの
たりに住んでいて、授業にだけは通っていま
した。

速水夫婦には子供がなかったのです。それ
で養女をもらって育てただけでも嫁に出
しちゃったから、夫婦だけになってしまっ
たのです。

——新島裏先生のご関係の方で、同志社に
関係されたのは速水先生が最後ですね。

新島　そうですね。

——新島家のご関係の方では、新島公義さ
ん・得夫さん、そしてご子息の公一さん。そ

れ以外に、どういふ方がいらっしやるん
ですか。

新島　裏先生の女きようだいでね、一人は
嫁に行つて広島で住んでおり、一人は静岡に
住んでいたときいてはいましたが。広島に住
んでおられた人は、胸を病んで亡くなったと
ききました。

——じゃあ、淋しいですね。でも公義さん
が雙六さんのご養子として新島家をつがれ
て、それから今日に至つておいでになるわけ
ですから。

新島　父・公義が新島家を継いだとはい
うものの、曾祖父（民治）さんたちは裏先生
の方でご厄介になつたんだから。うちの父は、
家を継いだけど大事にしなかつたのかねえ。

——大事にしなかつたというよりも、お父
さんはまだお若くて、民治さんたちと一緒に
裏先生のお家に住まれて、最初の何年かは英
学校へ通われたわけですから。

新島　裏先生のお家の門のところに平家が
あるでしょう。あそこに住んでいたのです。

——そうですね。裏先生がご建在であつた
ころでしょう。曾祖父の民治さんは、明治二
十年一月に、曾祖母のときさんは明治二十九

年に、あそこで亡くなられたんですね。

新島 そうです。

——公義さんや民治さんたちを安中から呼ばれたのは襄先生で、先生としては脱国したりして心配をかけたから、皆と一緒に住みになりたかったんでしょうね。お父さんの公義さんとしては、まだ若かったということもございませぬけど、新島家を継いでいるとはいうものの、襄先生が民治さんたちの実子であり長男ですから、できるかぎり、襄先生や曾祖母さんのご意思に従うという生活をされたのではないでしょうか。何かにつけて気をつかわれたらと思うますね。

新島 そういうことはあつたらうね。

——あつたと思いますよ。でもいまは、新島家といえば新島さんのおうちしかないわけですから。

新島 襄先生には子供がなかったからね。

——同志社といまの新島家の関係をどう考えればいいか、どうすればいいか。そういうことをとやかく申し上げる資格は、わたしにございませぬけど、時代がかわりましたけれども、両者がよそよそしいというのは、あまりいいこととは思いませんね。これは同志社

への注文ですけれども。

新島さんは毎年、若王子へお墓参りにきておられるそうですね。今年の四月にも来られたとか。

新島 はい、行きました。八重子おばあさんの五十周年忌年にね。一年に一回は行かなきゃと思っているんだが、だんだん脚が弱っちゃってね。

——あの坂道を、お一人で登られるというので、皆さん驚いていました。

新島 いや、駄目だ。もう駄目だな（笑）。でもまあ、家のことやお墓のことを息子たちにも教えておかなきゃいかなと思つてね。

——まだまだお元氣そうだから——。ちよいちよい同志社へもお立ち寄り下さると有難いですね。

そうそう、同志社ではいま『新島襄全集』を編集して、京都の同朋舎という出版社から刊行しはじめているんですが、本は届きましたでしょうか。

新島 いただいています。立派な本ができてけっこうなことです。

——何かご感想とか、ご意見とか、おきかせ下さいませんか。

新島 私は全くの門外漢だから、感想といつても、申し上げられるようなことはありません。ただ、立派にできて、感謝して、ときどき手にとって拝見するだけです。

——今日はわざわざ東京事務所までおいで下さって、長時間にわたつてどうもありがとうございます。今後ともどうぞお元氣でお願いいたしますように。

(一九八三年七月四日、同志社東京事務所にて収録)

表紙の言葉

クラーク記念館の鐘楼

同志社校地の東と西に、それぞれ向かいあって建てられたのである。このクラーク館と彰栄館。その塔も今では林立する建物と樹木に圧倒されて小さくなってしまった。このヨーロッパの城閣を想わず鐘楼の下にたたずんで見上げてみると、ハテ、こんなに大きかったかなと思つてしまう。

一瞬、昔の人の目になっているのかも知れない。

小野功夫(中学校教諭)